

聖火リレーこれで“復興五輪”名乗れる？ 整備すんだ場所ばかり**福島・浜通り 周辺に汚染土 「現実と程遠い」**

「(今年7月)に迫った東京五輪の聖火リレーのコースが決まった。「復興五輪」の趣旨に沿って、出発地点は東京電力福島第一原発事故後、収束作業の拠点になったJヴィレッジ。ただ、事故で多くの住民の生活が一変した福島県浜通りのコースを見ると、(原発事故の)被害を感じさせるような場所はあまり通らない。地元からは「これでは被災地の実態が伝わらない」との声が漏れる。

福島県浪江町の聖火リレーコース、研究拠点「福島水素エネルギー研究フィールド」が入る産業団地は現在建設中。(去年)12月20日に訪れると、作業員とガードマン以外に人影はなく、周りは空き家が目立つ。除染で出た汚染土を詰めた大型土のうの黒い山を横目に、除染や解体、造成工事の通行止めを避け、ダンプカーの列とともにぐるぐる遠回りしてたどり着いた。…「復興五輪」のイメージにぴったりだが、成果は産業団地の600mをリレーするだけ。

「こんな町はずれの新しい工場を走るだけじゃ、人ごとで終わる。町役場辺りや国道6号を通ればいいのに」と、近くに住む志賀秀成さん(47)。県内を転々と避難し、職探し中。自宅を再建し、今年の春に戻った。「近所の人たちはあまり戻っていない。今いない人は、もう戻ってこないでしょう。避難先で仕事や学校を見つけて、また町に戻って探すのはきつい。復興五輪だなんて、全然そんな雰囲気じゃない」

商業主義のランナー人選 被災の実態伝わるのか 住民がスポーツ楽しめる環境を

ただ、被災地では復興が道半ばの地域が少なくない。立命館大学の丹波史紀(ふみのり)准教授(社会福祉論)は「被災者の暮らしの再建はまだまだ途上。五輪を目指して道路や鉄道などハード面の復興が進んだ面はある。だが、きれいになった道路や建物を見せるだけでは、復興五輪とはおよそ言えないのではないか」と強調する。

福島第一原発周辺の福島県双葉郡7町村の住民を対象に生活実態調査をした丹波氏は、五輪のお祝いムードの中で取り残されたように感じている被災者もいるとみる。「五輪を契機に、国や組織委員会が責任を持って被災地の現状を世界に発信することが今も必要だ。それは住民自身にも求められる」

宇都宮大の中村祐二教授(スポーツ行政学)は「聖火リレーのランナーの一部はスポンサー推薦で決まるなど、商業主義の影響が色濃い。復興五輪と言うなら、施設の整備とともに暮らしが再建され、被災者が身近にスポーツを楽しめる環境を取り戻せるかが問われる。キャンプで訪れる海外の選手たちと交流し、五輪後も関係が続くような工夫も必要だろう」と述べ、こう主張する。「聖火リレーや競技はあくまで一過性。祝祭ムードの中で、今も過酷な被災者の暮らしが隠されるなら、復興五輪の看板は偽りのまま終わってしまうだろう」(「東京新聞」19年12月21日付け)



【帰還困難区域のために聖火リレーが通れない（浪江町津島地区）】



【放射能の防護服を着た聖火ランナー（韓国の反日団体 VANK が作成したポスター）（「産経新聞電子版」2月10日付け）】

◆五輪は一過性 ◇原発事故による被災地の復興と原発の廃炉は30～40年続く
 （大部分が帰還困難区域になっている）大熊町と双葉町は、聖火リレーを辞退しては？
 聖火リレーをすれば、世界中から“復興した”と思われてしまうのでは？
 喜ぶのは、安倍自公連立政権と東京電力！